

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年6月15日現在

機関番号：37125

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2009～2011

課題番号：21592879

研究課題名（和文） 性的暴力被害者へのメッセージの構築

研究課題名（英文） Creating messages for sexual violence's survivors

研究代表者

秦野 環（HATANO TAMAKI）

聖マリア学院大学・看護学部・准教授

研究者番号：00352352

研究成果の概要（和文）：身体的暴力を受けた被害者に対し、望まぬ妊娠と性感染症の予防だけでも可能にするべく、被害者とそれを巻き込むコミュニティーに対し、文化的受諾可能なメッセージを構築することを目指した。研究対象者は2007年末暴動時被害者で、質問紙調査、少人数によるグループ討議などを通じて被害状況や現状を調査・抽出した。初年度調査内容の還元、カウンセリングセッション等を行うことにより自助グループ形成とメッセージの構築に至った。

研究成果の概要（英文）：The research process which included interviews, focus group discussions, counseling sessions and organizing debriefing sessions brought not only creating messages for sexual violence's survivors but also made them strengthen and organizing their self-help groups to improve their life.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,700,000	510,000	2,210,000
2010年度	900,000	270,000	1,170,000
2011年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
年度			
総計	3,500,000	1,050,000	4,550,000

研究分野：医歯薬学

科研費の分科・細目：地域・老年看護学

キーワード：地域看護学

## 1. 研究開始当初の背景

- (1) 2007年末にケニア国内で起こった大統領選挙後暴動では、約1,000人近くが殺害され、女性として身体的被害・性的被害を受けたと考えられたものが約3,000人余りいると報告されていた。
- (2) ケニアにおいても妊娠とHIV感染予防としてのPEP（曝露後予防法）はあるとされていた。

## 2. 研究の目的

暴動時に受けた身体的・精神的・社会的損傷を消し去ることはできなくとも、被災後の新しい生活を構築するために、今後起こりうるかもしれない女性に対する暴力を予防するため、性的暴力による望まない妊娠とHIVの感染だけでも予防できるよう、文化的に受諾可能なメッセージを構築すること。

### 3. 研究の方法

#### (1) 質問紙調査

ケニアの首都ナイロビにあるキベラスラム地区とケニア中央部にあるナクル市で、それぞれ活動する団体を通じて、暴動発生時に被害を受け、かつ調査への参加を希望した者合計 188 人に質問紙調査を行った。倫理的配慮から、個人を特定できないことを条件に参加を依頼したために、次に行った少人数によるグループディスカッション ( Focus Group Discussion, FGD ) での発言内容との整合性を取ることは行っていない。

#### (2) 少人数によるグループディスカッション

2009 年度にはキベラスラム地区において 10 グループ、ナクル市において 9 グループの FGD を行った。2010 年度には、デブリーフィング (2009 年度の結果報告) としてナクル市内のグループに対し報告会、これらの参加者の中から希望者を募り、再度 FGD を行い、より深く語れる機会の提供とした。2009 年度に引き続き 2 度目の FGD であったことから、より多くの参加者が、より深い内容を語った。

#### (3) 地域のリーダー的役割にある人々への個別半構成的面接

ナクル市内においては 5 名、キベラスラム地区においては 4 名の地域活動家 (政府役人一人を含む) に半構成的面接を行った。

### 4. 研究成果

ケニア国内二つの地域 (首都にあるスラム街とケニア第 4 の都市であり暴動時に被害が大きかった場所) において研究調査を開始したが、ナイロビ市内キベラスラムには、多くの調査・支援団体が入っていたにもかかわらず、ナクル市内においては全くと言ってよいほど放置されていた状態であった。

この現状を鑑み、研究第 2 年度 (2010 年) からはナクル市内に限定し、研究活動を継続した。第 2 年度には 2 度の訪問を行い、調査結果を参加者にまず返却する (デブリーフィング) を行うことによって、聞き取りによる情報収集だけではなく「研究への参加者」としての意義づけを伝える作業を行った。また、その作業により研究参加者が自己の復興に向けて必要と思われることの希望等が明確に要求として提出され、カウンセリングセッションと収入向上プログラム事業の学習を行うこととなった。

第 3 年度 (2011 年) は研究最終目的である「メッセージの構築」のために、かつ研究活動をより意義深く、より広く対象地域へ

啓発を行うため、ケニア全土における「16 日間のジェンダーベースドバイオレンスに対する活動 ( Celebration 16 days of activism against Gender Based Violence 2011 )」 に合わせ 2011 年 12 月にケニアへ渡航した。

当該目的である「性的被害者へのメッセージの構築」に向け、過去 2 年間の研究参加者 (のべ約 300 人) と 3 年間の活動を振り返り、メッセージ” CHAGUA AMANI (自由の選択)” を採択した。これは平成 23 年度 (2011 年) のケニア全土における活動のテーマを踏襲した形となった。本研究参加者による新規メッセージの構築も考慮したが、メディアなどでも取り上げられ、かつ当該研究参加女性も賛同した本メッセージを用いることで、人々への普及効果を期待することとなった。

本ケニア渡航時、過去 2 年間の調査活動に参加した女性 59 名、現地調整員、ファシリテーターたちとミーティングを開催し、現在まで 3 年間の女性たちの取り組みについてのまとめ・振り返り、報告セッションを行った。結果、本研究を通して 4 つの女性グループが誕生し、その全 4 グループがケニア政府の「ジェンダー・子供・社会開発省」に自助グループ事業として登録を行うことができた。今後は、基礎資金を回転させ、自助グループとして発展させていく予定である。また、2011 年度渡航中に、8 名の研究参加者に対しより深く経験 (暴動、その後の経緯) を聞く機会をもった ( In depth interview )。インタビューを受諾した参加者の自宅を訪問し、彼女たち自身にとって安全、かつ快適な場所でのインタビュー、時間制限も加えず十分語っていただけことから、多くの示唆が得られた。

これらの活動を通して、国内暴動や紛争などにより身体的・精神的・社会的なトラウマを抱えた女性たちに対しては、継続的な心的サポートとともに、自立活動につながる何らかの経済的支援が重要であることがわかった。

### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[学会発表] (計 3 件)

- ① 秦野環、ケニア選挙後暴動時に夫を失った女性が受けた心身の傷の表現、第 30 回日本看護科学学会学術大会、2010 年 12 月 4 日、札幌コンベンションセンター・札幌

市産業振興センター（北海道札幌市）

- ② 秦野環、国内暴動時の女性に対する暴力ケニア選挙後暴動児の状況予防策構築に向けての取り組み ～地域活動家たちにインタビューを試みて、日本災害看護学会第12回年次大会、2010年8月29日、フェニックス・プラザ（福井県福井市）
- ③ 秦野環、国内暴動時の女性に対する暴力ケニア選挙後暴動時の状況、予防策構築に向けての取り組み 第一報、第17回多文化間精神医学会、2010年3月20日、コラッセふくしま（福島市）

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

秦野 環 （ HATANO TAMAKI ）  
聖マリア学院大学・看護学部・准教授  
研究者番号：00352325

### (2) 研究分担者

文珠 紀久野 （ MONJU KIKUNO ）  
山梨県立大学・看護学部・教授  
研究者番号：70191070

宮林 郁子 （ MIYABAYASHI IKUKO ）  
聖マリア学院大学・看護学部・教授  
研究者番号：40294334